

編集後記

編集委員の二年目。たいしてお役に立てぬまま、7号にひき続いてかなりの厚さの8号が刊行されつつあるのを、感心して見守っている次第です。書きたいことをお持ちの方が多勢いらっしゃることの証しです。この意欲が今後の『女性学評論』の一層の充実・発展をもたらすはず、と期待しております。(A. F.)

前回からの希望通り特集を組んで第8号を発行することができました。論文・書評をお書き下さいました諸先生に感謝申し上げます。ワープロを打ったり、レイアウトを考えたり、校正したり、かげで緻密な働きをして下さった豊福さん、岩森さんにも心から“有り難う”を申し上げます。一つの仕事を通していろいろ学ばせていただきますこともまた感謝です。(T. H.)

今年から編集委員に加えていただいたのですが、生来の無精故に時々欠席し、他の委員の方々に御迷惑をお掛けしてしまいました。今回は数々の優れた論文の原稿に目を通す機会に恵まれ、いろいろ勉強させていただきました。『女性学評論』が益々充実してゆくよう、御協力下さった方々に厚くお礼申し上げます。(M. I.)

初めて委員に加えていただき、専門分野以外の多様な原稿も編集の立場で読ませていただく機会を与えられ、とても勉強になりました。第8号は「近代化と女性問題」をテーマに特集が組まれ、みなさまの御協力で完成いたしました。感謝申し上げます。(N. I.)

1994年は日清戦争から100周年。日本の「近代化」—1894年からの50年は、軍事大国路線でばく進し大破滅。それからまた50年猛スピードの経済大国路線、今や大不況。この100年は、日本の女性にとって一体何であったか？ 本号の校正作業をしながら、ふとそう思った。なお今年は、本学が神戸女学院に改称して100年でもある。(T. U.)

